

○藤棚之藤

此の藤は、従前は藤棚白山社の社前にありて、世人藤棚の藤と呼べり。堀樽庵の三州奇談に、犀川の上覺源寺といふ寺の門を過ぎて向うに藤の花多く咲く宮あり。と載せたり。三州奇談は明和・安永頃の筆記なれば、其の時代はいまだ藤棚の名稱もなかりしゆゑに、藤の花咲く宮とは載せたるなるべし。後には名に聞えたる藤なりしかど、明治十八年の水害にかゝり、今は藤棚の遺名を稱するのみ。

○川上味噌蔵跡

此の地は、藤棚白山の舊社地の尻地にして、世人川上の味噌蔵と呼べり。弘化年中に川南町城戸屋六兵衛なる者の發起て、犀川河原の捨地をば乞請け、爰に庫蔵を建築して味噌を造り貯へけり。此の味噌は己が商賣のみに非ず。往昔中納言利常卿の時、金澤味噌蔵町に軍用の味噌蔵を建て、味噌を貯へ置かれしゆゑに、町名にも呼べりといひ傳ふといへども、其の庫倉早く絶えて傳言のみと成りにしを歎息し、爰に庫倉を設け、聊か味噌の貯用をなして、萬一非常の事あらば、國君へ奉り國恩の萬分を報ぜんとして造り

込みけるが、果して嘉永六年六月米利堅の軍艦相州浦賀へ來着し、開港事件初めて起り、諸藩へ海岸防禦方を命ぜられ、吾が藩に於ても幕命に依りて、加越能三州の海岸防禦の手當ありしにより、翌七年正月金子百兩を藩侯に呈上し、且軍糧の爲造り込み置きたる味噌蔵の貯用味噌を、悉く獻納致し度旨出願せり。依りて藩侯よりの賞譽に預りたり。城戸屋六兵衛は其の頃の奇特人にて、平生の行狀市中の商人と異り。殊に憐愍を専らとなし、殺生を惡み、諸魚を江河へ放ち、或は老馬老牛を憐み、江州路へ老馬老牛を賣り、彼の地にて皮を剥ぎ取るよしを聞き、牛馬は人に仕はれ一生勞するを、老いたりとして之を殺し皮を剥ぐを聞くに忍びずと、彼の川上なる味噌蔵の圍内に厩を建並べ、加越能三州諸郡の邑民へ其の由をば懇に告諭しけるに、諸郡の邑民も六兵衛が慈悲心に感服し、其の意に隨ひ、造かなる地より牽き來りけるゆゑ、爰に糞ぎ一生飼殺になしたりけり。

金澤古蹟志卷十六

城南片町傳馬町筋

○片町

此の町は、十二冊定書に載せたる金澤通町筋町割付に、片町二町三十三間三尺。とありて、舊藩中は本町廿七町の一町なり。舊傳に云ふ。昔犀川横流し、此の地邊河原の中嶋なりし頃は漸く片側に掛作りして商店をなしたり。故に片町の町名起りたりと。按ずるに、堂後屋傳來の元和元年八月利光卿の印書に、片町どしりや太左衛門と載せ給へり。元和以前より片町と呼びたる事知られけり。龜尾記に、片町はいにしへ尾坂下において、其の頃一方は城郭にて、南側のみ町家ありしゆゑに片町と名付く。然るを慶長七年に今の片町の地へ移轉し、舊名に據りて片町と呼べりと記載す。按ずるに、此の傳説は過聞なるべし。堂後屋傳記に、元祖三郎右衛門能州宇出津より天正十年に金澤へ出で、城邊米

町に居住す。後藩の用地と成り、片町へ轉地命ぜらるとあり。されば最前居住しける城邊の町地は米町と呼びて、そのかみ米商人共居住せし地にて、尾坂下也といへり。龜尾記は此の傳説をば過聞せしもの也と聞ゆ。楠肇が記せし小橋天神記にも、是まで川原なりし所へ民屋を移し、其の後地には寺庵を移し給ひ、寸地も残らず比隣建てつらなりしかば、俗呼んで川原町といひ、民家の片邊に立てつゞきたる所を片町と呼べり云々。とあり。おもふに、片町は今いふ片原町の意にて、本名は河原町なりとの説、さもあるべし。

○香林坊橋

金澤橋梁記にも香林坊橋と載せたり。楠肇が記せる小橋天神記に、今の香林坊橋をば小橋といひ、一名を道安橋とも號す。昔は犀川二派に流れて、大流に渡せるを大橋といひ、小流に懸けしを小橋と號す。然るを寛永八年の夏、府下火災以後城下の町街を改め給ふ時、犀川を南北の岸へ一流に疏し、小流は即ち惣構の堀つゞきに用ひ給へり。又一名道安橋と稱するは、小橋天神の社僧道安の橋側に住みける故